琉球大学学術リポジトリ

[研究動向] 上里賢一(UEZATO Kenichi)・高良倉吉(TAKARA Kurayoshi)・平良妙子(TAIRA Taeko)(編)『東アジアの文化と琉球・沖縄：琉球/沖縄・日本・中国・越南』

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所
	公開日: 2016-05-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 赤嶺, 守, Akamine, Mamoru
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34009

［研究動向］

上里　賢一（UEZATO Kenichi）・高良　倉吉（TAKARA Kurayoshi）・平良　妙子（TAIRA Taeko）（編）『東アジアの文化と琉球・沖縄――琉球／沖縄・日本・中国・越南――』

彩流社（東京）　2010 年 4 月　346 頁

赤　嶺　　守（AKAMINE Mamoru）

本著は琉球大学研究プロジェクト「人の移動と 21 世紀のグローバル社会」（文科省特別教育研究経費〈連携融合〉）のアメリカ研究班と中国・台湾研究班が 2009 年 11 月に開催した国際シンポ「コンタクト・ゾーンとしての島嶼における文化現象――沖縄と東アジア・太平洋島嶼地域――」の報告を収録したものである。本プロジェクトは、グローバル社会の進展にともなって近年ますます顕著となっている世界規模での人の越境・拡散・還流を視野に入れ、人の移動にともなって生起する文化混淆や社会変容などの諸現象に関する普遍的なメカニズムとプロセスを解明することを目的としている。本著にはシンポの 4 つの分科会「『世替わり』と越境」「言語と中国文化」「書籍と文化伝播」「『移動』と環海性」において発表された中国・台湾・ベトナムからの参加者を含む 17 名の発表要旨や論稿が収められている。以下、本稿では論文が寄せられた 14 編について論評する。

まず、【第一分科会:「世替り」と越境】であるが、鈴木悠「ある下級士族の経験した〈世替わり〉――八重山士族我那覇孫著とその時代」は、「琉球処分」期における八重山の地方役人の世替わりの様相を論じている。該論文は王府体制が解体していた旧慣温存期に、地方においては依然勤務評価となる星功の存続、口上覚による昇進伺いといった旧地方統治の体制が据え置かれていたことを指摘し、さらに「沖縄県間切島吏員規程」の公布により廃職になった間切吏員の一時金支払い等の実態を紹介している。これまでの研究の主流となっていた「琉球処分」期の中央政府の政策に視座を置く政治外交的アプローチに主眼をおかず、秩禄処分が見送られ、さらに旧体制が維持された旧慣温存期における地方の実態を検討した点に注目したい。朱徳蘭「基隆社寮島の沖縄人集落〈1895–1945〉」は、戦前の基隆市東北端に位置した社寮島（現在の和平島）の沖縄人集落における移住の実態を考察している。日本統治時代の基隆の沖縄人の生活状態に関して、朱氏は『台湾日日新報』、『日本統治時代台湾戸籍資料』、『台湾總督府統計書』等を駆使して、戦前基隆社寮島における石花菜採集の沖縄人の季節漁民が定住型の集落を形成する過程と原因を分析し、さらに戸主と同居する寄留者の同業縁、地縁、血縁（宗族縁）の重層的な人間関係、沖縄住民の移動状況及びグループ形成や住民地域との摩擦といった社会問題にも着目している。戦前の沖縄人集落については、又吉盛清（『日本植民下の台湾と沖縄』沖縄あき書房、1990 年）よって台湾各地に存在していたことが確認されていたが、基隆社寮島といった地域を限定した分析・検討を試みたのは朱氏が初めてである。戦前の台湾における沖縄人集落研究の方向性も示す先駆的な研究といっていいだろう。呉俐君「戦後沖縄本島及び宮古島における台湾系華僑の移住」は、沖縄在住の華僑、特に沖縄本島及び宮古島における台湾系華僑の移民に焦点を当て、その出国前の生活、出国の動機及び沖縄移住の経緯等について論じている。来日の動機については、台湾国内の政治不安という要素以外に、台湾へ出稼ぎに行った沖縄出身の漁師との結婚を理由とする移住などの事例

を挙げ、さらに彼らの帰化、台湾人意識の変容及び戦後の日本における台湾人の法的地位についても言及している。石垣島の華僑研究には、野入直美氏の研究（「石垣島の台湾人――生活史にみる民族関係の変容――(1)」『人間科学』第5号、2000年）があるが、宮古島華僑についての分析・研究は呉氏が初めてである。華僑に関する基礎資料がほとんど存在しない現況では、生活史を記録する台湾系華僑へのインタビューといった基礎データは、一次資料として研究上の意義も有する。ファン・ティ・トゥ・ヒエン「東アジアの冊封体制下におけるベトナムの特徴と変遷」は、ベトナムにおける中国の冊封については、ベトナム国王の請封が即座に認められなかった例や、ベトナム国王が統治を正統化するために姓を変え請封した例があり、また数度の請封を繰り返したにも関わらず中国に認められなかったり、本来請封されるべき爵位が認められなかった例も存在することを指摘している。ファン・ティ・トゥ・ヒエン氏は、そうした冊封事例に照らし合わせ、冊封とは単なる王朝の主権や独立を認めるのみの儀礼ではなく、むしろベトナムにとって、請封と冊封が持つ意味合いとは、国内的には治国思想としての儒教システムの中での正当性を確立するためであり、対外的には大国である中国との関係を安定維持するための効果的なシステム、或いはベトナム朝廷が対中国との外交戦略上必要に迫られて選択した方策とみなすのが妥当であると論じている。冊封体制を東アジアにおける宗主国中国の規定する超安定システムとする中国側の一般的な認識とは異なるファン・ティ・トゥ・ヒエン氏の論点は、中国の権威を一極化する従来の冊封体制研究のあり方に再考を促がす指摘といえよう。

【第二分科会：言語と中国文化】の林慶勲「明清時代の人々による琉球語の記述」は、陳侃・高澄『使琉球録』（1543年、嘉靖13）以降、蕭崇業・謝傑『使琉球録』（1579年、万暦7）、徐葆光編『中山傳信録』（1721年、康熙60）、会同館編丁種本『華夷訳語』、李鼎元『琉球訳』（1800年、嘉慶5）等10余種の明清代の文献に現れる琉球語の「寄語」と「字母」について論じている。林氏は字母に関しては、北方官話音韻体系によって対応する音の基礎を作り、必要な場合、さらに自身の母語を用いて字を選択する根拠としていたとして、陳侃以降の10余種の文献に現れる字母記述の差異を見いだしている。しかし、膨大な数の寄語記述の差異については、編纂者の音韻認識、その使用する言語や方言の影響を強く受け、それが体系的な音価の分析を難しくしているという。「寄語」の研究は幅広い官話や多種の地方方言の音韻学的知識を必要とし、個人研究で克服するには相当の難題を抱えていることがわかる。盧紅飈「琉球漢学の形成とその影響について」は、漢学の琉球における伝播形成を ① 明代初期の久米三十六姓の移住、② 琉球からの官生派遣、③ 冊封使節団の来琉の3点に求めている。伝播内容については、琉球漢詩、中国譜牒の影響を受けた『中山世譜』や『家譜』、儒学などを挙げて紹介しているが、琉球における受容にのみ留意し、18世紀以降に王府が展開した中国化政策やその時期的特徴、変容といった問題にほとんどふれていない点が残念である。

倉成多郎「在沖外国人陶芸家の沖縄陶芸文化受容の形態」は前半部分で、沖縄と関わった濱田庄司、金澤武雄、島袋常格、島袋常孝といった近代以降の窯業技術者たちの移動の情況を紹介し、後半で在沖外国人陶芸家、ニュージーランド出身のポール・ロリマー（Paul Lorimer）とアメリカ合衆国出身のニコラス・セントラ（Nicolas Centala）の制作活動の比較を行っている。沖縄陶芸文化の特徴については、戦前期に造られた「地方色」というキーワードが、戦後、そして現在も「沖縄イメージ、「壺屋焼らしさ」と様々な言葉にすり替わりながら、今日まで沖縄で焼き物を生産することを非常に大きな部分で規定していると述べている。しかし一方、身につけた技術一つで窯業技術者達が軽々と越境するケースも珍しくないという。陶芸文化の世界では、中心性や辺縁性という固定された位置関係を見いだすことはできず、枠組みに拘泥されない芸術者らの移動の実体

を確認している点に注目したい。

【第三分科会：書籍と文化伝播】のチン・カック・マィン論文「漢喃研究院について」は、1979年にベトナム政府閣議決定により成立した漢喃研究院の組織構成・研究内容・国際協力等を紹介している。チン・カック・マィン氏はその中の国際協力について、上海復旦大学附属文学歴史院との国際的な連携で刊行した『ベトナム漢文燕行文献集成』を挙げている。韓国で数年前に『燕行録』の全集が刊行され、進貢使節や冬至使節等の北京における進貢日程や活動及び琉球使節との交流の内容等が把握できるようになり、特に北京における使節の日程や活動についての資料が乏しい琉球側の進貢研究を進める上で、該史料は有用な比較資料となっている。『ベトナム漢文燕行文献集成』もそうした燕行録の類書で、ベトナムからの進貢使節は上京の路程が一部重なり、遭遇した琉球使節についての記録も収められている。琉球進貢使節との交流や貢路の比較研究を進める上で該史料も重要な資料となりうるだろう。グェン・ティ・オアィン論文「ベトナムと日本の国交関係――漢喃研究院所蔵の資料を基に」は、上記のベトナムの進貢使節や使者が中国で出会った琉球使節に関する記録を具体的に紹介している。『使華筆手澤詩』には、フン・カック・ホアン（馮克寛・1528–1613）が北京に赴き朝鮮と琉球の各使節と遭遇し帰途につく琉球の使者を見送った時に作った詩「達琉球国使」が収められ、『見聞小録』にはレー・クィー・ドン（黎貴敦・1726–1784）が使節として派遣された際に遭遇した琉球使節に関する記事、また『閩行雑詠草』にはリー・ヴァン・フック（李文馥・1785–1849）が台風で遭難した中国人を帰国させるために1830年に中国に派遣された際に読んだ詩である「見琉球国使者并引」が収められているという。上里賢一氏はシンポジウムの基調講演「東アジアの中の琉球漢詩」で、漢詩文は知識人の教養の基本的な要件の一つで、中国とその周辺の漢字文化圏にあっては、知識人同志が同席すると、詩文の贈答がなされ、個人の域をこえて、国の威信をかけたきわめて重要な外交的儀礼でもあったと述べている。こうした埋もれた資料の発掘は新たな歴史像を創造する。今後、多くのこうした史料の発掘を期待したい。井川義次「西洋に伝えられた東アジア――〈孝〉の概念をめぐって」は、中国の「孝」の概念がどのように解釈・翻訳され、海を越えてヨーロッパへ紹介されたのか、その実情について紹介している。該論文は琉球社会の「孝」の概念についてはふれていないが、「その影響下にあったわれらは、平常、宇宙論的な見方をすることはなくとも、どこかで親―子、祖先―子孫間の生命の連鎖というものについて永遠性を期待している。身近な感覚であればあるほど、これを根幹とする思想への信頼は深まる。超越的な存在を説かない、少なくとも、それへの信仰を問題としない中国の「孝」の思想は宗教に替わる浸透力をもって東アジアの文化形成に決定的影響を与え、現実社会においても秩序形成に積極的な役割を演じることになった」とする指摘は、琉球社会の〈孝〉の概念を考える上で示唆に富み興味深い。

【第四分科会：「移動」と環海性】の崎原綾乃「琉球芸能の中の仏教――未詳語〈左京の橋〉に関する考察」は琉球芸能でうたわれる左京の橋について考察している。崎原氏は琉球古典芸能の組踊の「姉妹敵討」「忠臣身替の巻」「高山敵討」「忠孝夫婦忠義」や念仏歌「浄土宗が孝論」などで、孝行など善行をすると「左京の橋広く」極楽に行けると歌われていることを指摘し、「左京の橋」の概念は、日本仏教を色濃く受け継いだもので、日本仏教をベースとした中世文学の影響も強く受けていると論じている。檀家制度が存在せず庶民仏教が普及していなかった琉球社会で、琉球芸能にこうした日本の仏教との関係を見いだす手法は、芸能史研究の学際的な広がりを予見させる。冨田千夏「琉球～中国を移動する五主――琉球の環海性による事象の一例として」は、唐船の乗組員として福州に滞在中に貿易活動を担う役目の五主について、琉球の環海性がもたらす事象の一つとして考察している。五主は進貢もしくは接貢派遣の際には一隻あたりに10名、護送船

の場合は6名が配され、福州における商品の価格・品質、地元の商慣行・言語等の知識が必要で経験が重視されていたという。冨田氏は該論文で五主の出自、渡唐の回数や滞在期間を『家譜』記録や『歴代宝案』に依拠して明らかにし、さらに技術伝播や貿易の「功績」による家譜下賜について事例を挙げて検討している。進貢貿易の研究については、すでに多くの研究成果が残されているが、五主の活動の実態を明らかにしたのは冨田氏が初めてである。論文では薩摩における五主の動向についてはふれていないが、五主は薩摩への返上物を載せた船に乗り込み薩摩へもいっている。今後その点についても研究をさらに深めてほしい。深澤秋人「海域史の中の那覇港――一八四〇～五〇年代の状況」は、19九世紀中頃の鹿児島航路と福州航路を中心に那覇港に出入りする船舶の状況および港を抱えた那覇について検討している。深澤氏は、1857年（咸豊7）に那覇港を発着した大和船と琉球船の総数を把握し、大唐船・鰹飛舟・春楷船といった船の種類及び船頭・沖船頭・搭乗者を明らかにし、さらに1762年の楷船と1844年の夏楷船の水主の出身地の比較を行い、1844年の夏楷船の水主については慶良間島や久高島の島嶼部よりも那覇四町と久米村などの町方が多いことを指摘している。船舶の出入りの多い那覇港とそれを囲む那覇における職能集団の関わりについては、これまでほとんど研究がなされていないが、職能集団の技術継承が那覇でも行われていたという指摘に注目したい。徐斌「林氏の故郷・濂浦（林浦）と中琉歴史関係」は福州市から南東に11キロほど離れた南台島に位置する冊封船建造のドッグが置かれた林浦（濂浦）集落の概況、「七科八進士」「三代五尚書」を生み出した林一族を紹介し、さらに『濂浦林氏家譜』、福州『藤山蔡氏家譜』と久米村の林喜を始祖とする『林氏家譜』、蔡崇を始祖とする『蔡氏家譜』の比較分析を通して、『林氏家譜』『蔡氏家譜』の始祖は林浦の林氏・蔡氏の後裔であろうと推測している。中国の族譜は定期的な仕次ぎがなされることはなく、譜師によって不定期に作成されることが多く、世系図に疑問の残る族譜も少なからず存在するといわれている。かといって、徐氏が指摘する可能性を否定するわけではない。「久米三十六姓」の始祖を遡及するには、中国側のそうした関連族譜の発掘が必須で、研究を進める上での重要な一次史料であることはいうまでもない。歴代の戦乱や文化大革命で中国は多くの族譜を失っている。福建の研究者には是非今後もそうした族譜の発掘にご尽力いただきたい。

今回のシンポジウムは若手研究者に発表の場を与え、特に沖縄で初めてベトナムの研究者を招請しておこなわれたという点で、これまでのシンポジウムとは異なっていた。本著の刊行に関しては、シンポジウムがめざした「沖縄を人と人、文化と文化が接触・衝突・交渉する〈コンタクト・ゾーン〉としてとらえる」といったアプローチ、そして広い視野から重層的に沖縄を捉えるといった一定の目標も達成しているように思える。

（琉球大学）